

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：32635

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2018～2021

課題番号：18H05709・19K20906

研究課題名(和文) 成長と分配を両立させたマクロ経済分析の可能性 ロバートソン経済学の再検討

研究課題名(英文) On Macroeconomic Analysis Balancing Growth and Distribution: a re-examination of Robertsonian Economics

研究代表者

仲北浦 淳基 (Nakakitaura, Junki)

大正大学・地域創生学部・専任講師

研究者番号：70823095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の最大の成果は数千葉に及ぶロバートソン関連文書の収集と整理を行なったことである。2018年9月に千葉商科大学所蔵「ロイ・ハロッド文書」、2019年2月～3月にケンブリッジ大学レン図書館、ケンブリッジ大学図書館、マーシャル図書館所蔵のロバートソン関連文書を収集した。それらを目録形式で整理し、部分的に翻刻と翻訳を行なった。これらの調査から、ロバートソンが分配論においても「努力」概念を堅持していたこと、ピグーとはマーシャル経済学に関して異なる解釈をしていたことが分かった。また、計量テキスト分析の手法でロバートソンが経済の貨幣的側面よりも実物的側面を重視していたことを検証する試みを行なった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

先行研究においてほとんど分析されてこなかったロバートソン文書を、本研究では不完全ながらも一覧形式で整理することができた。それによって、同時代人との人的交流の一部が明らかとなり、ロバートソンの手書きメモ等の未公開資料が大量に現存していることが分かった。マクロ経済学の草創期においてロバートソン(ケンブリッジ学派)が果たした役割を明らかにするための基礎が整った。

研究成果の概要(英文)：The greatest achievement of this study was the collection and organization of most of papers of Dennis Robertson. I collected 'Roy Harrod Papers' (Chiba University of Commerce) in September 2018, and all of 'Papers of Dennis Robertson' (Wren Library) and related documents (Cambridge University Library and Marshall Library) from February to March 2019. I organized them in a catalog format, and reprinted and translated some of them. These investigations revealed that Robertson had adhered to his core concept of "effort" in his theory of distribution as well, and that he had had a different interpretation of Marshall than Pigou. I also attempted to verify Robertson's emphasis on the 'real' rather than the 'monetary' aspects of the economy phenomena by means of text-mining methods.

研究分野：経済思想史、経済学説史

キーワード：経済思想史 経済学説史 ケンブリッジ学派 マクロ経済学 テキストマイニング

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究の開始当初の着想は、マクロ経済学草創期のデニス・ロバートソンの経済学を再考することで、ケインズとは異なる形のマーシャル=ピグー=ロバートソン流のマクロ経済分析を体系化することができるのではないかと、いうものであった。そのためには、ロバートソンの経済学の発展過程や同時代人との交流がどのようなものだったのかを明らかにすることが必要であり、そのためには未公開資料「ロバートソン文書」の収集が必要だと考えた。それらの一次資料の存在は知られているものの、ほとんど分析されていない状態だった。

2. 研究の目的

本研究の延長上にあるビジョンは、マーシャルの系譜をひくロバートソンの経済理論と人的ネットワークに注目することで、マクロ経済学草創期においてロバートソンが果たした役割を明らかにし、マーシャル=ピグー=ロバートソン流のマクロ経済分析を体系化することである。そのために本研究では、その基礎的な材料となる「ロバートソン文書」を収集、整理することで今後の分析の土台を築くことを目指した。

3. 研究の方法

ロバートソンの経済理論の形成過程を捉えるために、非公刊の手稿や同時代人との書簡を収集、整理し、理論形成において特に重要と考えられる資料に関しては、翻刻作業をして分析を進めた。また、文献調査においては質的な分析のみならず、定量的なテキスト分析の手法(テキストマイニング)も積極的に導入を試みた。

4. 研究成果

(1) ロバートソン文書の整理と翻刻

収集した914項目のロバートソン関連の文書について、タイトル、日付、項目、宛先、形式などのタグをつけながらカタログ形式で整理した。その後、ロバートソンの経済理論の形成過程を理解する上で重要と考えられるものに関しては翻刻作業を行なった。

(2) ロバートソンの経済理論に関する研究

* ロバートソンの企業組織論：個人の行動原理から国民経済を捉える過程において、ロバートソンは中間的な組織(企業・産業)を想定していた。そこで、彼が、諸個人の集合体である企業組織をどのように捉えていたかを明らかにした。彼の企業組織論においては、組織内の各経済主体(資本家、労働者、株主、金融家など)の意思決定の「管理可能性」が強調されていることが分かった。

・仲北浦(2019)「ロバートソンの企業組織論 「努力」における分化と統合の相克」

* ロバートソンの分配論：1920年代から30年代におけるロバートソンの諸論文から、特に事実に解明的な分配論、1950年代におけるロバートソンの諸講演から、特に規範的な分配論を抽出して整理した。ロバートソンは戦後社会主義の賃金平等主義的な傾向に反対論を展開していたことが明らかになった。彼は、賃金上昇による労働者の生活基準の上昇を重要とみなしつつ、人為的な賃金の引き上げは、実業家への報酬(分配)を圧迫することで、事業の供給を減少させ、結局は労働者の生活基準を著しく低下させる、という主張を展開した。つまり、労働者への分配のみを強調するのではなく、実業家(労働者)への分配にも配慮し、両者の適切なバランスを検討しなければならない、と主張していたのである。

・仲北浦淳基「ロバートソンの分配論 政策論からの再構成」、2019年6月

* ロバートソンの経済変動論：ロバートソンがケンブリッジ大学で経済学を研究していたころの文献と未公開資料(A.C.ピグーの書簡)を分析することで、彼の経済変動論が、ケンブリッジの外部の理論(特にアフタリオンをはじめとするフランス流の経済変動論)ではなくケンブリッジ学派の枠組みの中で醸成されていったことを示した。

・仲北浦(2021)「The Making of Dennis Robertson's A Study of Industrial Fluctuation: Didn't Robertson's Theory of Trade Cycle Really Fit to the Cambridge School of Economics?」

* ロバートソンの貨幣観：ロバートソンの専門領域は貨幣論や金融論とされることが多いが、彼は貨幣論・金融論においても貨幣的現象に通底する実物的側面をつねに重視していたことをテキストマイニング分析から示唆した。

・仲北浦淳基・小峯敦(2019)「マクミラン委員会におけるロバートソンの経済観 テキストマイニングから判明する「実物」と「貨幣」」

* ロバートソンの政府観：費用逡減産業に対する国家介入に関するロバートソンの諸文献(1930年代前半)から彼の政府観を部分的に明らかにした。政府が一時的に赤字を負担して介入することを是認する一方で、その介入を継続的に行なうことには強く反対した。政府による事業への介入は、ある程度の経営の健全性(収益-費用)が保たれていなければならないという主張が展開されており、この点において彼はピグーと対立していたことが明らかになった。

・仲北浦淳基(2022)「費用逡減産業に対する国家介入のあり方-ロバートソンのピグー批判における独占理論の萌芽-」

(3) 計量テキスト分析(テキストマイニング)手法の導入

* 外部変数の分析：マクミラン委員会での議論を分析対象とし、発言内容というテキストデータに「発言者」という外部変数を付け加えて計量テキスト分析を行なった。それによって発言者ごとにその発言内容の特徴を浮き彫りにできる可能性を指摘した。

・仲北浦淳基「マクミラン委員会におけるロバートソンとケインズ テキストマイニングによる対話分析」、2018年12月

* コーディング・ルールの作成：テキストの質的分析と量的分析の接合部とも呼ぶべき「コーディング・ルール」は、その作成段階において恣意的になってしまう場合がある。その危険を最小限にし、なるべく客観性を保った「コーディング・ルール」を作成するための手順を提案した。

・小峯敦編(2021)『テキストマイニングから読み解く経済学史』、第9章「ロバートソンにおける「実物」と「貨幣」 コーディング・ルールの作成と特徴語の抽出

* 対応分析による異時点間比較：異なる年代に書かれた同テーマの文書のそれぞれの特徴を浮き彫りにするために、テキストマイニングの「対応分析」が応用できるかどうかを検討した。出現頻度の少ない語が見えにくくなるという課題はあるものの、時系列による文書の変化やそれらの特徴についてある程度は明らかにすることができることが分かった。

・仲北浦淳基(2022)「地方創生」における政策キーワードの変遷 テキストマイニングによる「総合戦略」の分析」

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 仲北浦淳基	4. 巻 106
2. 論文標題 The Making of Dennis Robertson's A Study of Industrial Fluctuation: Didn't Robertson's Theory of Trade Cycle Really Fit to the Cambridge School of Economics?	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大正大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 275-298
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 仲北浦淳基	4. 巻 71
2. 論文標題 ロバートソンの企業組織論 「努力」における分化と統合の相克	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経済学論叢	6. 最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 仲北浦淳基・小峯敦	4. 巻 58
2. 論文標題 マクミラン委員会におけるロバートソンの経済観 テキストマイニングから判明する「実物」と「貨幣」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 経済学論集	6. 最初と最後の頁 59-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 仲北浦淳基	4. 巻 107
2. 論文標題 費用逓減産業に対する国家介入のあり方-ロバートソンのピグー批判における独占理論の萌芽-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大正大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 247-268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小峯敦・仲北浦淳基	4. 巻 20-01
2. 論文標題 ケインズ『一般理論』における訳語の選定～学者訳と日常訳の協働に向けて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 龍谷大学経済学部 Discussion Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件(うち招待講演 1件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 仲北浦淳基
2. 発表標題 D.H.ロバートソンの分配論 政策論からの再構成
3. 学会等名 経済学史学会全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 仲北浦淳基
2. 発表標題 マクミラン委員会におけるロバートソンの言説 テキストマイニングからの考察
3. 学会等名 第62回経済思想研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 仲北浦淳基
2. 発表標題 D. H. ロバートソンにおける分配論 1950年代の講演を中心として
3. 学会等名 第126回経済学史学会西南部会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 仲北浦淳基
2. 発表標題 マクミラン委員会におけるロバートソンとケインズ テキストマイニングによる対話分析
3. 学会等名 第63回経済思想研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 仲北浦淳基
2. 発表標題 デニス・ロバートソンにおける企業組織と労資関係
3. 学会等名 ケインズ学会公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小峯敦・仲北浦淳基
2. 発表標題 ケインズ『一般理論』における訳語の選定～学者訳と日常訳の協働に向けて
3. 学会等名 第11回ケインズ学会全国大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 小峯敦 編、古谷豊、福田進治、下平裕之、船木恵子、松山直樹、仲北浦淳基、金井辰郎、斉藤尚、岸見太一、大槻忠史 著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 244
3. 書名 テキストマイニングから読み解く経済学史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------